フランス語と私

森野 水琴

二〇一八年五月

夜間大学で第二外国語としてフランス語を選択した。ドイツ語を選択する学生が多いことから、フランス語を選択した学生は同じ組で学習することになった。本来は姓名の五十音順に組を分けてあるので、ドイツ語を選択していたら別の組で学習したはずの人達と一緒に学ぶこととなったのである。その中の一人の女性と卒業して数年後に結婚した。私にとってフランス語は「出逢いの言語」なのである。

初の海外旅行は結婚して十数年してからで、タヒチに行った。本社がパリにある観光会社の施設に滞在したので、フランス語を大量に聞いたはずのだが、英会話すら出来ない状態だったため、帰国後、まずは英会話を習うことにした。年に一度、海外旅行に出かけたおかげで、片言の英会話を愉しめるようになったが、滞在する施設をより愉しむためにフランス語を学ぶことにした。私にとってフランス語は「ゆとりの言語」になった。

フランス語の入門の先生からラテン語と古典ギリシャ語のそれぞれ入門を学んだ。私にとってフランス語は「教養を高める言語」になった。

フランス語を学ぶようになって数年経ち、パリを観光した私は、現地ガイドが文化を尊重している姿に接し感動したものである。それから十七年ほど経過するが、この感動のおかげで今でもフランス語学習を継続している。

最近フランス語で書かれた本を辞書無しで読んで愉しんでいる。翻訳する必要に迫られていないので気楽なものである。そのような中でも「美学」は学びたいテーマとなった。古典ギリシャ語で書かれたプラトンにまで遡るのが興味深い。

外国語を学べば学ぶほど、日本語が好きになってくる。日常の雑多な事も美化されていく感がする。これからもフランス語を学びながら更なる高みを目指したい。

二〇二二年八月

以前このエッセイを書いてから四年経過した。

昨年の四月から年金暮らしになり、翻訳家を目指していたのだが、東京オリピックをテレビ観戦しているうちに、日本語でもフランス語でも書いてみたくなり、今年の一月から小説投稿サイトのコンテストに応募するようになった。

このエッセイはコンテストとは関係なしにオリジナル作品として六月に投稿したのであるが、スターという声援を五十個獲得したのを記念して、連載していくことにした。

四年前と同様に、フランス語の書き取りとフランス文学の授業は継続している。

昨年の七月からフランス語通訳ガイドの授業も受講するようになった。通訳ガイドの資格取得が目的ではなく、日本の魅力をフランス語で伝えるのが目的である。とはいえ「通訳ガイド物語」というタイトルで書いてみたいという野望はある。

フランス語の授業は夏休みになったが、ガイドブックに限らず、フランス語の「本を読む」である。

二〇二二年十月

フランス語の授業の夏休みが終わり、予習に慌ただしい日々が続く。

今年のノーベル文学賞にはフランス人の作家が選ばれた。

この作家の作品を四月から三か月間、フランス文学の授業で学んだので感激した。せっかく学んだのに、日本語に翻訳していなかったのが悔やまれる。翻訳に目を向ける良い機会になる。

二〇二二年十一月

長野県の松本マラソンを完走した翌日、松本城を見学した。旅行支援のキャンペーンが実施されていることもあり、外国人観光客も見かけるようになった。

フランス語が耳に入ってくる。さすが文化を尊重するお国柄だと感心するものの、当方からはフランス語が一言も出てこない。通訳ガイドの良い練習機会なのに情けないばかりである。

来年も松本マラソンを走りたい。そして少しでもいいからフランス語を話してみたい。

十二月は奈良マラソン。朝のジョギングをしながら、奈良でもフランス語話す機会があるかもと準備しているところである。

二〇二三年二月

フランス語でお気に入りの動詞に「アンシャンテ」がある。

日本語に訳すと「…を大いに喜ばせる、有頂天にする」「…を魅了する、魅惑する」「…に魔法をかける」となる。

これを受け身の形にすると、発音は同じ「アンシャンテ」だが、「はじめまして」という挨拶になる。

「あなたにお会いして、私はまるで魔法にかかったようですわ」という意味になると、フランス語の入門の先生から教わった。

何と素敵な表現なのだろうと、魅了され、まさに魔法にかけられて、今日に至っている。

一九九九年に習ったので、もう二十四年前になるのだが、一九九九をフランス語で言うと思えない数え方になるのも楽しい思い出になっている。

二〇二三年五月

以前、コロナ禍の影響で、フランス語の授業が休講になり、課題に対してレポートを提出することになった。自分の将来を予言してフランス語で書くというものだったが、「琴線に触れる」という表現にしたつもりが、添削された結果、「私を感動させる」という表現になっていた。使われた動詞は「エムヴオワール」。

電子辞書の仏和大辞典で調べてみると、「…（の心）を動かす、感動させる、興奮させる」とある。

用例を見ていて座右の銘にしているものがある。和訳は

自ら感動せずに人を感動させることはあり得ない

二〇二三年七月三日

フランス語を習っている学校の卒業試験の合格発表があった。何とか滑りこめて安堵しているところである。

二〇〇四年から受け続けている試験で、一次試験が大の苦手の書き取り。今年やっと通算三回目の通過で、二次試験の作文に進んだ。辞書を使わずに和文仏訳三つのお題から一つ選びフランス語で小論文。三度目の正直というべきか、初めて三次試験の口述に進んだ。

昨日、三次試験を受けたばかりである。まずは五つある文学テキストから一つ選び、十五分の準備の後、音読、要約、分析、コメント、意見交換と続く。次に裏返しにしてある五つのお題から二つ選び、表に返して一つ選び、十五分の準備の後、導入、発展、結論を述べて、意見交換する。どちらも言葉に詰まって沈黙するのは避けたい。強引に自分の得意分野に話しを誘導して乗り切った。

後半の試験に選んだお題は「若い世代と高齢者の世代は本当に違うのか」というお題。意見交換で言葉に詰まりそうになったとき、ひらめくがままに、「以前はフランス文学で、これは美しい表現だというコメントを耳にしたものだが、最近ほとんど耳にしなくなった」と話し、「美しい表現を使って話し合えば世代を越えて理解しあえる」と言って締めくくった。

安堵するのも束の間で、来年さらに上の試験を受験するための準備を始めたところである。

二〇二三年九月

九月二十七日の水曜日からフランス語の秋学期の授業が始まった。土曜日とあわせて週二回の通学である。宿題も出て忙しくなると思ったら、木曜日の夜に発熱。金曜日に病院で調べてもらったらインフルエンザに感染していた。

二日間、ほとんど寝て安静にしていたら熱も下がり、五日間の自宅待機で済みそうである。

年初めに高熱で寝込んだ時と同様に、生き急ぐなかれと自分に言い聞かせている。

来年から、日本語原作、英語訳、フランス語訳の同時連載を開始したい作品があるので、今はその準備段階としたい。

二〇二三年十一月十四日

フランス語に愛されたいのなら それ以上にフランス語を愛せば良い

そのような言葉が夢に出てきた。もっともだと思いが覚めた。

これはいろいろ応用できる。フランス語を辞書に置き換えると

辞書に愛されたいのなら それ以上に辞書を愛せば良い

来年の教授資格の試験、二次試験には辞書無しでの仏文和訳が待ち構えている。

単語を覚えられただけ覚える日々は、単語を愛せられるだけ愛する日々になる。

二〇二四年五月二十六日

フランス語を習っている学校の教授資格の試験、第一次試験を昨日受験した。苦手の書取りだけの試験、合格発表まで十日ほどある。合否は微妙だが、二次試験の筆記試験に向けて準備しているところである。